TRAN SEHA
超学際ネットワーク形成

TranSEHA Newsletter

Vol. 03

November 2026



Contents

TranSEHAの事業概要

01 2026年度前半事業報告
02 2026年度前半の主な出来事
03 第3回TranSEHA若手セミナー
04 TranSEHAセミナー

TranSEHA各グループの活動状況

05 激甚災害と年代測定グループ
06 考古地磁気研究グループ
07 太陽地球環境史グループ
08 文理融合データベース研究開発グループ

09 TranSEHAメンバー紹介：
太陽地球環境史グループ

11 研究活動報告

14 一般向け活動／2026年度後半の主な予定

学際領域展開ハブ形成プログラム　2026年度前半事業報告

宇宙地球環境科学と歴史学・考古学を結ぶ超学際ネットワーク形成（TranSEHA）

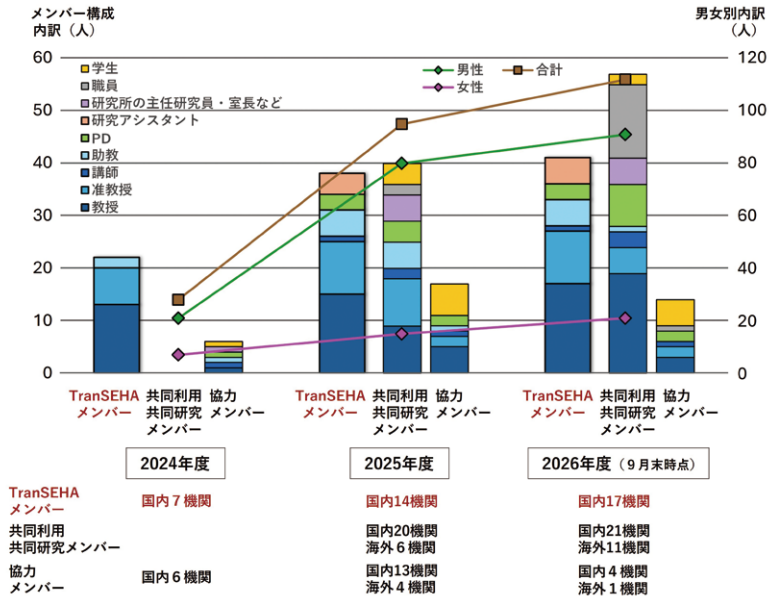
拠　点	名古屋大学宇宙地球環境研究所（ISEE）
参画機関	国立歴史民俗博物館、山形大学高感度加速器質量分析センター、九州大学アジア埋蔵文化財研究センター、情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設、情報・システム研究機構統計数理研究所、名古屋大学デジタル人文社会科学研究推進センター、大阪公立大学大学院理学研究科、福島大学大学院共生システム理工学研究科
協力機関	岡山理科大学フロンティア理工学研究所、高知大学海洋コア国際研究所

（2026年9月30日現在）

TranSEHAでは、宇宙地球環境科学と歴史学・考古学をつなぐ超学際ネットワークの形成、分野や機関の枠を越えた共同研究の推進、若手人材の育成、研究成果の社会発信を柱として活動を展開しています。2024年９月に開始した本事業は、当初の参画機関５機関・22名から、現在は８機関・41名へと拡大し、研究ネットワークが着実に広がっています。2026年度も、「激甚災害と年代測定」「考古地磁気研究」「太陽地球環境史」「文理融合データベース研究開発」の４研究グループを基盤として、多彩な研究活動が展開されています。各グループの活動については本号５～８ページを、フィールド調査やデータ解析などの個別の研究活動については11～13ページをご覧ください。

こうしたネットワークの形成と共同研究の推進を支えるため、特任助教２名、特任研究員２名、研究アシスタント５名（博士後期課程の大学院生；うち２名は2026年度に新規採用）を雇用しています。これらの人材は、ISEEだけでなく複数の参画機関にも配置され、各研究グループの研究活動を支えるとともに、異なる分野の研究者や参画機関をつなぐ橋渡し役を担っています。

2025年度から、ISEEの公募型共同利用・共同研究に「超学際ネットワーク形成」枠を新設し、国内外から分野横断的な融合研究を公募しています。2026年度は、追加採択１件を含め、計27件が採択されました。これらの共同研究には、国内外の多様な大学・研究機関から計71名が参画しており、分野や機関の枠を越えた研究が進められています。



TranSEHA参画メンバーの構成とその推移（2024～2026年度）
TranSEHAメンバー、共同利用・共同研究メンバー、協力メンバーについて、職位等の内訳（棒グラフ）、男女別人数および合計人数（折れ線グラフ）、所属機関数の推移を示す。2026年度は９月末時点のデータ。

異分野間の相互理解と若手人材の育成も、TranSEHAの重要な活動に位置付けています。6月には第3回若手セミナー「広域テフラ」を開催し、大山火山でのフィールド巡検と島根大学での試料処理・顕微鏡観察の実習を通じて、若手研究者や大学院生が実践的な知識と分析手法を学びました（本号3ページをご覧ください）。また、2026年度後期募集のISEE共同利用・共同研究「学生国際派遣支援（海外滞在）」に1名採択され、大学院博士前期課程の学生の海外での研究活動を支援しています。2026年度は、研究アシスタント1名が日本学術振興会特別研究員（DC1）に採用され、特任研究員1名が科研費「若手研究」を獲得し、若手参画メンバー1名がJST「創発的研究支援事業」に採択されました。さらに、特任研究員1名が日本第四紀学会でポスター発表賞を受賞するなど、若手研究者の活躍はめざましいものがあります。

2026年度からは、メンバー全員が参加できる「TranSEHAセミナー」を毎月開催し、各メンバーの最新の研究や調査活動を共有するとともに、自由な議論や意見交換を通じて、分野間の相互理解を深めています（4ページをご覧ください）。実際に、ベトナム調査の報告をきっかけとして、複数の研究グループ間で新たな連携が生まれるなど、分野を超えた共同研究の展開にもつながっています。

研究の魅力を次世代や社会に伝える活動にも力を入れています。8月には、小学校高学年30名を対象に、夏休み体験学習「琵琶湖から学ぶ地球科学～地層・水・生きもの～」を実施しました。滋賀県立琵琶湖博物館でのプランクトン観察やISEEでの水質分析・火山灰の顕微鏡観察、成果発表などを通じて、子どもたちが科学研究における一連の過程を体験しました。また、理系漫画『広域テフラってなんだ!?』を発行し、専門的な研究内容を親しみやすく伝える取り組みも進めています（14ページをご覧ください）。

TranSEHAでは、研究成果の創出に加え、異なる分野の研究者が互いに学び合い、新たな共同研究を生み出すこと、そして次世代を担う人材を育成することを大切にしています。今後も、拡大する研究ネットワークを生かし、分野や機関、国境を越えた連携をさらに深めながら、学際研究の新たな可能性を広げていきたいと考えています。（南 雅代）

2026年度前半のTranSEHA共同利用・共同研究者の所属機関

海外（15名）

●ベトナム（5名）：Hue Museum of History、My Son World Cultural Heritage Management Board、Southern Institute of Social Sciences、University of Sciences, Hue University　**●インド（5名）：**International Union of Pure and Applied Physics (IUPAP)、Tata Institute of Fundamental Research (TIFR)、Vikram Sarabhai Space Centre　**●フィンランド（1名）：**University of Oulu　**●韓国（3名）：**Korea Astronomy and Space Science Institute（KASI）、SohNam Institute for History of Astronomy　**●中国（1名）：**National Astronomical Observatories, Chinese Academy of Sciences (NAOC)

国内（56名）

●名古屋大学（17名）：環境学研究科、情報基盤センター、博物館、附属図書館、ISEE　**●大学（名古屋大学を除く）（27名）：**大阪公立大学、岡山理科大学、金沢大学、関西学院大学、九州大学、京都大学、群馬大学、島根大学、中部大学、東京大学、東京理科大学、徳島大学、福島大学、山形大学　**●研究機関・その他（12名）：**板橋区教育委員会事務局生涯学習課、エネルギー・金属鉱物資源機構（JOGMEC）、科学技術・学術政策研究所、極域環境データサイエンスセンター、国立感染症研究所、国立極地研究所、国立天文台、国立歴史民俗博物館、総合地球環境学研究所、鳥取地学会、日本原子力研究開発機構（JAEA）

TranSEHA2026年度前半の主な出来事 Previous Events

2026年	4月	**第1回TranSEHAセミナー**「2026年3月ベトナム調査報告：タインロイ城郭遺跡とミーソン遺跡を中心に」
	5月	**TranSEHA Newsletter Vol.02を発行**
		第3回韓国フィールド調査
	6月	**第2回TranSEHAセミナー**「2026年1～3月ケンブリッジ在外研究報告：古代ローマ時代の庭園の復元を中心に」
		第3回TranSEHA若手セミナー「広域テフラ」
		Space Climate 10 Symposiumに参加
		第4回韓国フィールド調査
		ジャパン・オープンサイエンス・サミット2026（JOSS2026）にてセッションF6「データリポジトリにおける生成AI活用」を開催
		メタデータ変換システムへの生成AIの活用に関する名大附属図書館との研究会
	7月	**第3回TranSEHAセミナー**「極域科学における異分野データ統合とナレッジグラフの活用」
		第2回焼岳フィールド調査
	8月	**令和8年度 ISEE 夏休み体験学習**「琵琶湖から学ぶ地球科学～地層・水・生きもの～」
		第3回焼岳フィールド調査
		第4回ベトナムフィールド調査
		第4回TranSEHAセミナー「地磁気永年変化を用いた須恵器窯跡の年代推定―滋賀県沢組遺跡における予察的検討」
		理系漫画『広域テフラってなんだ!?』を発行
	9月	徳島フィールド調査
		第1回激甚災害と年代測定グループ研究会

新たに加わった 若手メンバー Young Member

Research Assistants（RA）

林 忻 Xin Lin

総合研究大学院大学日本歴史研究コース

激甚災害と年代測定グループRAです。出土木材を研究しています。木材解剖学的樹種同定と酸素同位体比年輪年代法を用い、近世江戸の遺跡で使われた木材の種類や年代、産地、流通経路を調べています。日々、顕微鏡をのぞき、出土木材に残る歴史を探っています。



宋 羿岑 Yi-Cen Song

九州大学大学院地球社会統合科学府

考古地磁気研究グループRAです。考古学を専門とし、台湾先史史、製作技術を研究しています。学際的研究と地域間比較を通じ、過去が現在をどう形づくり、私たちがいかに今の姿になったのかを探究しています。



第3回TranSEHA若手セミナー @大山火山・島根大学

TranSEHAプログラムでは、若手研究者・大学院生の育成と分野を超えた交流を積極的に推進しています。その一環として、第3回TranSEHA若手セミナー「広域テフラ」を2026年6月9日～10日に開催しました。本セミナーは、大山火山（鳥取県）および島根大学を会場として、広域テフラ研究の基礎から応用までを学ぶことを目的に実施し、18名（TranSEHA関係者10名、島根大学関係者8名）が参加しました。

初日のフィールド巡検では、奥野、石賀 敏氏（鳥取地学会）、Andreas Auer講師（島根大学）の案内のもと、大山火山周辺の大山池、服部、草谷原、鍵掛峠、御机、笠良原など計7地点の代表的な露頭を観察しました。姶良Tnテフラ（AT）、大山倉吉軽石（DKP）、キリン沢火砕流堆積物などを観察し、テフラの層相、広域対比の方法、噴火様式の違いなどについて学び、火山活動とテフラ形成過程への理解を深めました。また、枡水原高原（みるくの里）や鍵掛峠展望台から大山火山の山体地形を遠望し、見る方向によって大きく異なる山容を体感しました。



露頭前での若手セミナー参加者の集合写真



大山火山周辺の野外巡検ルート　野外巡検の各地点（①～⑦）と移動ルートを示す。地図はGoogle Mapsを基に作成。



島根大学におけるテフラの観察実習の様子

2日目は島根大学において、奥野による「広域テフラとは」と題した講義に続き、テフラ試料の水洗処理と顕微鏡観察実習を行いました。参加者は火山ガラスや鉱物の観察方法、テフラ同定の基本技術を実際の作業を通して学びました。続いて、Auer講師による大山火山のマグマ供給系や岩石学的特徴についての講義が行われました。午後には、平峰、Erika Vivas Cruz氏（島根大学・博士前期課程）、一井 新氏（大阪公立大学・博士前期課程）による漂着軽石や大山火山に関する研究発表がありました。その後の総合討論では、テフラのジルコンU-Pb年代測定に関する最新の研究事例の紹介なども交えながら、広域テフラ研究の将来展望や他分野との連携可能性について活発な意見交換が行われました。

本若手セミナーでは、大山火山でのフィールド巡検と島根大学での室内実習を連続して実施することで、テフラの野外観察から試料処理・顕微鏡観察に至る一連の研究プロセスを体験し、広域テフラ研究に関する実践的な知識と技術を体系的に学ぶことができました。また、英語による講義や研究発表も行われ、国際的な研究交流の機会にもなりました。宇宙地球環境科学、火山学、地質学、考古学など異なる分野の研究者・学生が共に学び、議論することで、分野間の相互理解が深まりました。TranSEHAが目指す分野横断型研究ネットワークの形成と若手人材育成につながる有意義なセミナーとなりました。

（奥野 充・南 雅代）

TranSEHAセミナー　TranSEHA Seminar

学際的な研究を推進するためには、異分野の研究者同士の相互理解が不可欠です。そのためには普段から他分野の研究者の研究発表や活動報告に直接触れ、質問や意見交換の機会をもつことが重要です。本学際ハブでは、2026年度より、メンバー全員が参加できる「TranSEHAセミナー」を毎月開催し、分野間の相互理解を深めています。このセミナーでは、毎回一人のメンバーが最近の研究内容や調査活動などについて発表し、時間にとらわれずに質疑応答や意見交換を行っています。

「若手セミナー」が、まとまった時間をかけて分野ごとの体系的な知識を習得する機会であるのに対し、「TranSEHAセミナー」は、個々のメンバーの「今」の研究や活動を共有し、お互いの研究への理解を深める場として位置付けています。この二つのセミナーを通じて、異分野間の相互理解と交流を促進し、学際研究の基盤形成を推進します。

（TranSEHAセミナー担当　加藤千恵）

第1回 北原 優（考古地磁気研究グループ）　2026/4/27



「2026年3月ベトナム調査報告：タインロイ城郭遺跡とミーソン遺跡を中心に」

2026年3月6日から29日に実施したベトナム調査について報告が行われ、タインロイ城郭遺跡等で得られた様々な調査データや測定結果、背景情報を統合する必要性が共有されました。このセミナーを通じて、考古地磁気研究グループと、激甚災害と年代測定グループとの連携に加え、文理融合データベース研究開発グループとの新たな連携にもつながりました。

第2回 川本 悠紀子（太陽地球環境史グループ）　2026/6/2



「2026年1～3月ケンブリッジ在外研究報告：古代ローマ時代の庭園の復元を中心に」

ケンブリッジ大学での在外研究の経験と、これまで取り組んできたポンペイの「ウェッティの家」の庭園に関する研究について報告が行われました。特に、19世紀末に行われた庭園発掘とその後の復元が十分な検証を経ずに進められてきた現状について、現地踏査の成果も交えた紹介がありました。先駆的な文理融合研究の事例を通じて、今後の本学際ハブにおける学際研究の展開を考える上で有益な知見が得られました。

第3回 Qi Zhang（文理融合データベース研究開発グループ）　2026/7/10



「極域科学における異分野データ統合とナレッジグラフの活用」

極域科学における多様な分野のデータや研究成果が紹介されるとともに、これらのデータが個別に管理され、分野横断的な活用が容易ではないという課題が示されました。こうした課題に対し、ナレッジグラフを用いて異分野のデータを結びつける取り組みや、AIを活用した統合データ検索システムについて紹介が行われました。学術研究における複合的な情報の把握に役立つナレッジグラフについて、その具体的なイメージを共有することができました。

第4回 山本 裕二（考古地磁気研究グループ）　2026/8/21



「地磁気永年変化を用いた須恵器窯跡の年代推定
― 滋賀県沢組遺跡における予察的検討」

完新世以降の東アジア地域の考古資料を対象に、考古地磁気年代測定に資する地磁気方位・強度の永年変化標準曲線の構築と、その適用に向けた取り組みが紹介されました。考古地磁気による年代推定の実例が示され、適用範囲や資料・データの取り扱いについての理解が深まるとともに、今後のさらなるグループ間連携につながる情報交換の場となりました。

激甚災害と年代測定グループ
Cataclysmic Disasters and Dating Group

太陽・地球の激甚イベント探査と新しい高精度年代法の発展
Exploring Cataclysmic Solar and Terrestrial Events and Developing New High-Precision Dating Methods

年輪や堆積物には、過去の太陽活動、環境変動や災害の痕跡が記録されています。本グループでは、これらに含まれる同位体の分析を中心に、過去に発生した巨大噴火や地震などの激甚災害、さらには歴史イベントの正確な年代決定に取り組んでいます。2026年度からは、地震学・歴史地震学を専門とする石瀬素子准教授（山形大学）が新たにメンバーとして加わり、地震・土砂災害の痕跡や歴史記録など、さまざまな資料を組み合わせた多角的な激甚災害研究をさらに推進しています。

2026年度前半には、国内外でさまざまな研究活動を行いました。6月上旬には、第3回TranSEHA若手セミナー「広域テフラ」を開催し、本グループメンバーの奥野、南、平峰を中心に、大山火山でのフィールド巡検を実施しました。また、島根大学ではテフラ試料の処理や顕微鏡観察の実習・講義を行い、若手研究者が具体的な研究手法を学ぶ貴重な機会となりました。

国内外での学会活動も活発に行っています。6月上旬にはフィンランドで開催されたSpace Climate 10 Symposiumにおいて、三宅が年輪に記録された小規模な炭素14スパイク（激甚太陽イベントの痕跡であるとともに、暦年代の高精度な決定に利用できるタイムマーカー）について招待講演を行いました。この研究成果はMiyake et al. (2026)としても出版されています。また、8月下旬に開催された日本第四紀学会2026年大会（創立70周年大会）では、奥野、木村、佐野、篠崎、平峰の5名が、年輪酸素同位体比を用いた年代学的研究や気候復元、津波・火山噴火に伴う陸上プロセスなどについて招待講演を行いました。さらに、9月上旬にはグループ内研究会を開催し、鬼界アカホヤ噴火の年代推定、江戸時代の木材の産地推定、古津波や火山噴火の年代推定、自動グラファイト調製装置を用いた炭素14の分析結果や炭素14分析のラボ間比較、堆積物の炭素14スパイクなどについて研究成果を報告し、活発な議論を行いました。異なる分野の研究者が成果を共有することで、新たな共同研究や研究手法について意見を交換する貴重な機会となりました。

こうした活動に加え、メンバーの受賞もありました。奥野は、2026年度ISEE共同利用・共同研究貢献表彰を受賞しました。これは、名古屋大学の加速器質量分析による放射性炭素年代測定を通じた、多年にわたるISEEの共同利用・共同研究、研究支援、教育・啓発活動への貢献が評価されたものです。また、平峰は、2026年8月下旬開催の日本第四紀学会2026年大会において、「鬼界アカホヤ噴火の発生年代の高精度化に向けた屋久島埋没木の年輪年代学的検討」のポスター発表を行い、若手・学生発表賞（ポスター若手部門）を受賞しました。

今後も、年輪や堆積物などの自然記録と歴史資料を組み合わせ、高精度な年代決定を基盤として、過去の激甚災害や太陽活動・環境変動の実態を明らかにしていきます。

（三宅芙沙）

名古屋大学
宇宙地球環境研究所
三宅 芙沙　准教授
南 雅代　教授
En-Bi Choi　研究機関研究員
科研費「若手研究」採択

国立歴史民俗博物館
坂本 稔　教授
箱﨑 真隆　准教授
平峰 玲緒奈　特任研究員
日本第四紀学会2026年大会 若手・学生発表賞（ポスター若手部門）受賞
Xin Lin　研究アシスタント

山形大学
高感度加速器質量分析センター
門叶 冬樹　教授

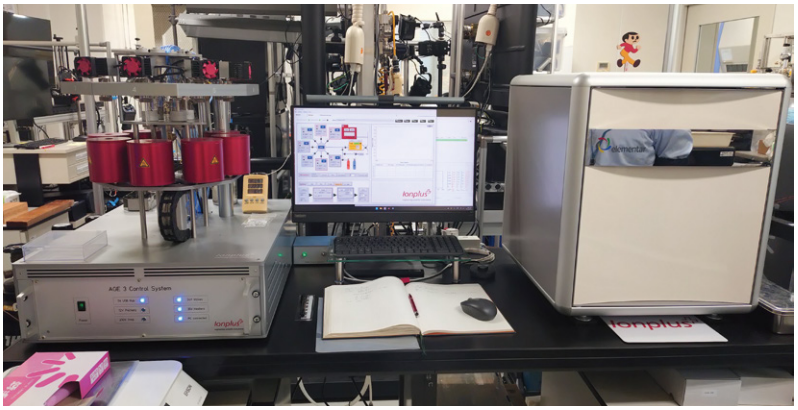
山形大学
理学部
石瀬 素子　准教授　新メンバー

大阪公立大学
大学院理学研究科
奥野 充　教授
ISEE共同利用・共同研究貢献表彰受賞

福島大学
大学院共生システム理工学研究科
木村 勝彦　客員教授

立教大学
環境学部
佐野 雅規　准教授

中央大学
社会理工学部
篠崎 鉄哉　助教


元素分析装置（EA：右）と自動グラファイト調製装置（AGE3：左）


日本第四紀学会2026年大会において
若手・学生発表賞を受賞した平峰玲緒奈研究員

考古地磁気研究グループ
Archaeomagnetic Research Group

古地磁気年代測定法の拡張と人文科学との融合研究

Expanding Paleomagnetic Dating Methods and Fostering Integrated Research with the Humanities

名古屋大学宇宙地球環境研究所、九州大学アジア埋蔵文化財研究センター、高知大学海洋コア国際研究所、岡山理科大学フロンティア理工学研究所が連携する「考古地磁気研究グループ」では、古地磁気学と考古学・人類学などの文理融合研究を推進しています。以下に、2026年度前半の活動を紹介します。

本グループでは、日本・アジア各地において、考古地磁気学に関連する学際的な調査を継続して実施しています。

a）ベトナムでは、年2回の調査を継続して実施してきました。2026年8月の調査では、これまでの調査で考古地磁気強度実験用のレンガ試料を採取したフエ市のタインロイ遺跡において、遺構の構造や形成過程をより詳細に理解することを目的に、現地踏査および建築関連材料に焦点を当てた資料調査を実施しました。また、ダナン市の世界文化遺産ミーソン遺跡では、現在修復作業が行われている7基の遺構を対象として、レンガ片群の体系的なサンプリングを実施しました。（詳細は12ページの研究活動報告をご覧ください。）

b）2026年3月にメンバーが台湾を訪問して採取した土器片について、考古学的な記載・整理が終了し、8月から考古地磁気測定を開始しました。今回の試料は、台湾北東部の花蓮市周辺の遺跡群から出土した土器片で、炭素14年代測定により紀元前7世紀から紀元後9世紀に位置づけられる5つの層準から採取されたものです。台湾における考古地磁気強度変化曲線の構築に向けて研究を進めています。

c）リサーチアシスタントの高橋は、これまで九州各地で板碑の調査を実施してきましたが、新たに宮城県名取市でも調査を開始しました。考古学的な調査に加え、岩石磁気測定などの地球科学的な方法も導入し、学際的な研究を展開しています。

また、台湾南部に位置する鵝鑾鼻遺跡から出土した貝製品およびその製作関連資料について、アジア太平洋地域における学術的な位置づけを明らかにすることを目的に、2026年5月から宋 羿岑（Yi-Cen Song）がリサーチアシスタントとして本グループに加わりました。

2026年8月には、福岡市の福岡国際会議場で開催されたAOGS（Asia Oceania Geosciences Society）において、古地磁気学のセッション（Magnetism Across Time and Space: Unlocking Earth and Planetary Histories）が開催されました。本グループメンバーの畠山による「Archaeomagnetism in Japan」と題した招待講演のほか、多数の考古地磁気関連の研究発表が行われました。

（大野正夫）

名古屋大学
宇宙地球環境研究所
南 雅代　教授

九州大学
アジア埋蔵文化財研究センター
大野 正夫　教授
加藤 千恵　助教
北原 優　特任助教
高橋 寛宇　研究アシスタント
Yi-Cen Song　研究アシスタント

岡山理科大学
フロンティア理工学研究所
畠山 唯達　教授

高知大学
海洋コア国際研究所
山本 裕二　教授
佐藤 哲郎　講師



現在修復作業が行われているダナン市（ベトナム）の世界文化遺産ミーソン遺跡



AOGSでの畠山の招待講演

歴史文献に残る激甚太陽嵐からの現代文明への影響推定

Quantification of Potential Impacts of Historical Extreme Solar Storms on Modern Civilization through Historical Records

太陽地球環境史グループでは、歴史学者、天文学者、地球物理学者が連携し、歴史文献に残された過去の天文現象や地球環境変動の記録を手掛かりに、太陽地球環境の極限状態の復元や長期変動の解明に取り組んでいます。本研究グループでは、これまで世界各地の歴史文献を調査し、日食、太陽黒点、太陽面爆発、地磁気変動、低緯度オーロラなどの記録を探り、そこから過去の太陽地球環境の様相を復元する研究を進めてきました。研究対象は、これまでのところ、現代から3000年前にまで及んでおり、今なお新たな手掛かりを求めて史料を博捜中です。当プロジェクトに謝辞のついた論文に限っても、本グループからは11報の論文が刊行または掲載決定済みです。

太陽嵐に関する研究は、大きく進展しています。2024年5月に発生した太陽高エネルギー粒子嵐の際のスペクトルやフラックスの復元を進めた他、1940年代の太陽高エネルギー粒子嵐についても過去のデータの蒐集・復元を行い、これまで2時間の分解能でしかわかっていなかった時間発展の様子を分単位で詳らかにし、その数値データを提示しました。また、1859年に発生したキャリントン・イベント（観測史上最大級の太陽嵐）についても、氷床コアデータを用いて、太陽高エネルギー粒子のフラックスの上限値を拘束しました。その翌年の1860年、植物学者として名高いAlfred Wallaceが航海記録の中で報告した低緯度オーロラらしき現象について、その記述や周辺地域の地磁気データを分析した結果、低緯度オーロラではなく大規模なスプライト（中間圏での発光現象）だった可能性が高いことがわかりました。加えて、地磁気強度が著しく低下したラシャンプ・エクスカーション期について、地磁気のカットオフ剛性の計算を進め、当時のように地磁気が弱い状態で激甚な太陽高エネルギー粒子嵐が起きた場合、地球環境にどのような影響が及び得るのかについても検討を進めています。

太陽活動の長期変動に関する研究でも、見るべき進展がありました。太陽活動の強さを定量的に評価する指標の一つに太陽黒点群の数があります。これまでの一部の復元研究では、基幹となる観測者を決めてその観測データを相互較正する手法（バックボーン法）が用いられていました。しかし、本グループの研究により、バックボーンとして使用されてきた10個のデータのうち、一つは原典が散逸しており、もう一つは観測地や観測機材がしばしば変更されるなど、データの均質性に問題があることがわかりました。これに対し、本グループではDesingやCarringtonらの観測記録からデータを取り出し、この問題に一定の代替案を提示しています。

日食記録についても、紀元前8～紀元前6世紀、14～16世紀の検討が大きく進み、当時の地球自転速度の変化を復元しました。特に、紀元前709年については当時の太陽コロナ構造と炭素同位体比ベースの太陽活動の復元の比較、1567年については当時の太陽半径の推定において、見るべき進展がありました。

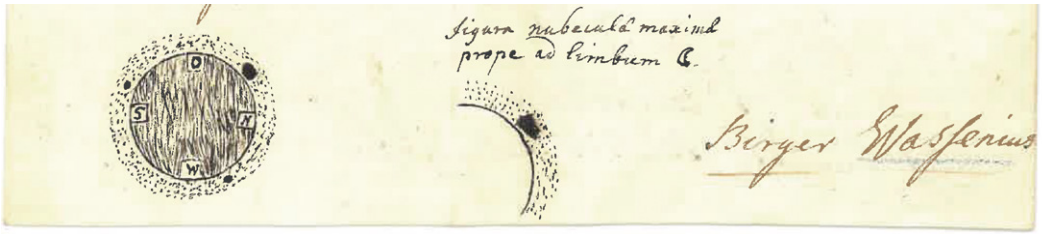
このように、本グループでは歴史文献に記された多種多様な手がかりから、過去の太陽地球環境の極限状態と長期変動の復元を試みています。読者の中に太陽活動や地球環境の異変の手がかりになりそうな歴史記録を見かけられた方がいらっしゃいましたら、ぜひ情報をお寄せください。そうした記録の一つひとつから、これまで知られていなかった過去の太陽地球環境の断面が蘇ることもあるかもしれません。（早川尚志）

名古屋大学
宇宙地球環境研究所
早川 尚志　助教
Nicholas Larsen　特任助教

名古屋大学
デジタル人文社会科学研究推進センター
加藤 久美子　教授
川本 悠紀子　准教授
岩田 直也　准教授
小島 敦　研究アシスタント

名古屋大学大学院人文学研究科
附属人類文化遺産テクスト学研究センター
伊藤 早苗　准教授

筑波大学
図書館情報メディア系
村田 光司　准教授



現状では観測史上最古と考えられるプロミネンスのスケッチ。1733年の皆既日食時のもの（MS Wassenius of the Royal Academy of Sweden; see Hayakawa et al. (2026), ApJ, 1007, 189）

メタデータ登録と公開による文理融合研究の促進

Metadata registration and publication to promote research that integrates the humanities and sciences

異分野の研究資源を「つなぐ」データ基盤へ



文理融合データベース研究開発グループでは、TranSEHAの多様な研究分野で生み出されるデータや研究成果を分野横断的に結びつけ、新たな融合研究を生み出すための情報基盤の構築を進めています。2026年度前半は、これまで進めてきたメタデータの整備・公開に関する試みをさらに発展させ、異分野の研究資源の間にある関係を発見する仕組みの検討と試作を進めました。

その中心となるのが、生成AIを活用した「橋渡しメタデータ」の開発です。研究対象、研究手法、時間・空間スケールなどを手掛かりに異なる研究分野の研究資源を結びつけ、従来のキーワード検索だけでは見つけにくかった分野間の関係を発見することを目指しています。そのため、論文の書誌情報、タイトル、要旨などから、生成AIを用いてメタデータ候補を生成するプロトタイプを開発しました。この取り組みの詳細については、本号13ページの研究活動報告(伊藤の記事『生成AIで異分野をつなぐ「橋渡しメタデータ」の試み』)をご覧ください。

この成果については、2026年11月8日～12日に開催される地球電磁気・地球惑星圏学会に、「異分野研究資源の発見を支援する生成AIを用いた橋渡しメタデータ候補生成の試作」と題して投稿し、発表を予定しています。複数分野の研究資源への適用を通じて、橋渡しメタデータの有用性と、AIによる候補生成と人によるレビューを組み合わせた運用方法の検証を進めています。

さらに、分野横断的なデータ利用を支えるため、メタデータの標準化やマッピング、研究データの公開方法についても検討を進めました。6月には名古屋大学附属図書館でメタデータマッピングに関する検討会を行ったほか、Japan Open Science Summit(JOSS)に参加し、データリポジトリにおける生成AIの活用やLocal LLMを用いたメタデータ生成など、国内の取り組みについて情報収集・意見交換を行いました。

一方、2026年度のISEE共同利用・共同研究課題では、TranSEHA超学際ネットワーク形成に関する課題として、6件の「データベース作成」課題が採択され、多様な研究資源を対象としたデータベース構築が進められています。これらは本グループとは別に採択された共同利用課題ですが、今後はこれらの課題の研究者とも情報交換を行いながら、本グループで検討しているメタデータや分野横断的な探索手法との連携を進めていく予定です。

今後は、橋渡しメタデータの対象を論文だけでなく、観測データ、歴史資料、写真、文化財・遺跡に関する記録など、多様な研究資源へと広げ、実際のデータを用いた検証を進めます。個々のデータを「蓄積・公開する」基盤から、異なる分野の研究資源を「つなぎ、新しい研究の接点を発見する」基盤へと発展させることで、TranSEHAにおける超学際研究の形成を支援していきます。　　(三好由純)

名古屋大学
宇宙地球環境研究所
三好 由純　教授
大塚 雄一　教授
谷口 英駿　研究アシスタント

情報・システム研究機構
データサイエンス共同利用基盤施設
(2026年10月1日付で
「未来科学システム共創施設」に名称変更)
門倉 昭　特任教授
田中 良昌　准教授
Qi Zhang　特任研究員

情報・システム研究機構
統計数理研究所
上野 玄太　教授
中野 慎也　教授

名古屋市立大学
データサイエンス研究科
能勢 正仁　教授

TranSEHAメンバー紹介：太陽地球環境史グループ
Solar-Terrestrial Environmental History Group

早川 尚志　Hisashi Hayakawa
助教
名古屋大学宇宙地球環境研究所（ISEE）超学際ネットワーク形成推進室/総合解析研究部



太陽地球物理学、激甚宇宙天気、歴史天文学、環境史
Solar-Terrestrial Physics, Extreme Space Weather, Historical Astronomy, Environmental History

過去の激甚太陽嵐、太陽活動長期変動を解明すべく、世界各国のアナログ観測記録や歴史文献に残る太陽黒点、地磁気、オーロラの証拠を精査しています。これにより太陽嵐や太陽活動の検討の時間幅を数百年、数千年に延伸し、宇宙天気、宇宙気候の極限状態の究明を目指しています。

Nicholas Larsen
特任助教
名古屋大学宇宙地球環境研究所（ISEE）超学際ネットワーク形成推進室



磁気圏物理学、宇宙線物理学、宇宙天気、航空機被曝
Magnetospheric Physics, Cosmic Ray Physics, Space Weather, Aviation Radiation

歴史上の太陽嵐・磁気嵐の復元から得られたデータを使って同時代の地磁気のシールド能力をモデリングしています。この情報は、激甚現象での宇宙線による航空機高度被曝リスクなど、宇宙天気による影響の見積もりや宇宙天気現象の「最悪のシナリオ」の定量化、これらの影響を緩和するシステムの構築において重要です。

加藤 久美子　Kumiko Kato
教授
名古屋大学デジタル人文社会科学研究推進センター（DHSS）/人文学研究科



東洋史（近世の大陸東南アジア北部・中国西南部）
Early Modern History of Northern Mainland Southeast Asia and Southwestern China

アジアの歴史、特に現在の中国雲南省南部、ミャンマーのシャン州東部、タイ北部、ラオス北部の近世の歴史を研究しています。近代的な国民国家が成立する以前に存在した「タイ族世界」の小規模なタイ族の国々と、周辺の大王朝（中国、ビルマ、シャム）との間にあった関係を明らかにすることを目指しています。

川本 悠紀子　Yukiko Kawamoto
准教授
名古屋大学デジタル人文社会科学研究推進センター（DHSS）



西洋古典学、西洋古代史（ローマ）、西洋建築史
Classics, Ancient History (Roman), Architectural History

古代ローマ時代（主に紀元前１世紀から紀元後２世紀）の住宅と庭園の発展について、考古学的資料や文献史料をもとに研究しています。発掘や自然科学分析（樹種分析・炭素14年代測定）も活用して、イタリア半島における古代ローマ時代の実状を探っているほか、古典籍から天文学的現象を繙くプロジェクトなどにも参加しています。

岩田 直也　Naoya Iwata
准教授
名古屋大学デジタル人文社会科学研究推進センター（DHSS）



西洋古代哲学
Ancient Philosophy

プラトンとアリストテレスを中心とする西洋古代の認識論と形而上学が専門です。経験論と生得説の対比を通じ、知識の獲得に必要な基盤的信念の問題とその方法論の探究が研究の主であり、近年は、古典文献を大規模言語モデルで分析する特化型AI対話システムの開発を進め、西洋古典研究や教育の手法革新を目指しています。

伊藤 早苗　Sanae Ito

准教授
名古屋大学大学院人文学研究科附属人類文化遺産テクスト学研究センター（CHT）



楔形文字文書学
Assyriology

紀元前１千年紀前半に西アジアの大半を支配したアッシリア帝国の歴史を楔形文字アッカド語文書を用いて研究しています。その中でもとりわけ粘土板に刻まれたアッシリア王室書簡を研究対象とし、アッシリア王碑文などの記念碑的文書には記録されないようなアッシリア帝国の様々な側面の解明に取り組んでいます。

村田 光司　Koji Murata

准教授
筑波大学図書館情報メディア系



西洋中世史（ビザンツ史）、歴史天文学
Medieval Western History (Byzantine Studies), Historical Astronomy

専門は歴史学で、中世の西ユーラシア、とりわけビザンツ（東ローマ）世界の史料を精査し、日月食・彗星などの記録の評価と社会的背景を探っています。史料批判の厳密さを損なうことなく、天文学者の利用に耐える望遠鏡以前の歴史的天文データベースの構築に貢献したいと考えています。

Space Climate 10 Symposium参加報告

2026年６月９日～12日にかけて、フィンランド・オーランド諸島で開催されたSpace Climate 10 Symposiumに、太陽地球環境史グループの早川、激甚災害と年代測定グループの三宅、Monterde-Andrade氏（ISEE・特任研究員）とともに参加しました。Space Climate Symposiumは、太陽ー地球系を研究対象とする多様な分野の研究者が集う国際会議です。本会議では、現在および過去の宇宙気候学研究に関する数多くの発表が行われ、私たちのグループが進めている歴史時代の太陽嵐に関する研究とも密接に関連する内容が多く含まれていました。今回の参加を契機に、会議に参加した複数の研究グループとの共同研究につながることが期待されます。

６月12日に行った私自身の研究発表では、古いながらも現在なお広く利用されている磁気圏モデルを再検討した成果を報告しました。本研究では、このモデルの現行実装にいくつかの顕著な問題点が存在することを明らかにし、それらを修正するとともに、歴史時代の超巨大地磁気嵐にも適用できるように改良を行いました。発表後には多くの参加者と議論を交わし、今後の研究に向けた有益な提案や助言を得ることができました。

（Nicholas Larsen）



Space Climate 10 Symposiumで研究発表を行う著者



オーランド諸島・マリエハムンにて

極域科学データをつなぐ ― AIを活用した新しいデータ探索

極域では、気象、海洋、生物、雪氷、地質など、さまざまな分野で観測や調査が行われ、多くのデータが蓄積されています。しかし、これらのデータは、分野やプロジェクトごとに異なるデータベースやWebサイトで公開されており、必要なデータが「どこにあるのか」や「何と関連しているのか」を調べることは容易ではありません。

そこで、極域環境データサイエンスセンターでは、分散している極域科学データをつなぎ、分野を越えて探しやすくするため、Polar Science Knowledge Graph（PSKG）を開発しています。PSKGは、各データベースに登録されたデータと、生物・環境・地域などの科学的な情報を関連付けて整理する仕組みです（図1）。これにより、別々の場所にあるデータでも、その内容や関係を手掛かりに見つけやすくなります。

近年、生成AIの発展によって、情報検索の方法も変わりつつあります。従来は利用者自身が適切な検索語を考える必要がありましたが、AIを使えば、「南極の海で生物に影響する環境条件を知りたい」といった文章から、関連する情報を探し出すことができます。現在開発しているPENGUINでは、AIが質問の内容を読み取り、PSKG内のつながりをたどりながら関連データを探索します（図2）。専門的なデータベース名や検索語を知らなくても、知りたい内容から必要なデータにたどり着ける仕組みを目指しています。　（Qi Zhang）

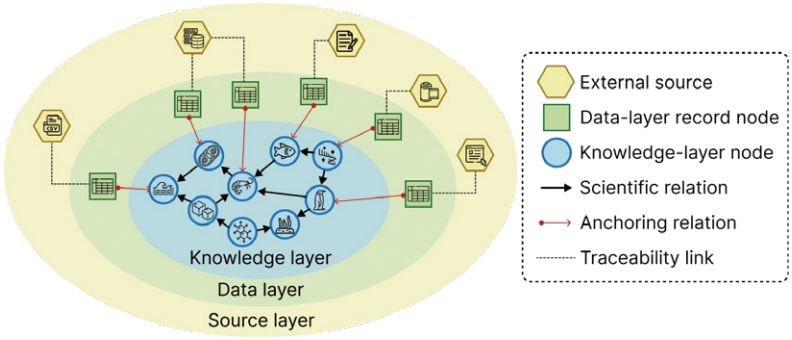


図1：Polar Science Knowledge Graph（PSKG）の三層構造　異なるデータベースやWebサイトなどの情報源（Source layer）と、そこに登録された個々のデータ（Data layer）、さらに生物・環境・地域などの科学的な情報（Knowledge layer）を関連付けて整理する仕組み。

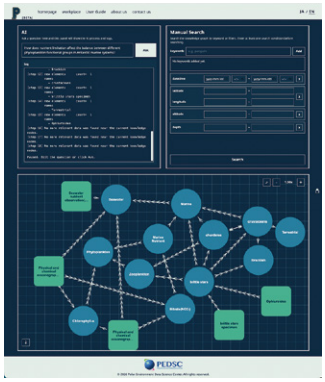


図2：AIを活用したデータ探索システムPENGUIN　文章による質問やキーワードからPSKG内の関連情報を探索し、データ同士のつながりをグラフで確認しながら、関連するデータを探すことができる。

見えない津波の痕跡を探る―創発から始まる新たな津波研究―

科学技術振興機構（JST）の2025年度創発的研究支援事業（以下、創発）に、研究課題「マイクロ・分子・遺伝子レベルで紐解く巨大津波の将来像」が採択されました。創発は、独立前後の研究者を対象に、原則7年間、最長10年間にわたり研究を支援する事業です。長期的な研究費に加え、トップ研究者によるメンタリングや異分野の研究者との交流、研究機関による研究環境整備、博士課程学生を雇用する創発RA制度など、研究者が挑戦的な研究に取り組むための手厚い支援が得られることが特徴でもあります。

採択課題では、過去の津波の物的証拠である「津波堆積物」を対象に、従来の研究が抱える津波痕跡の識別と年代決定の課題に挑みます。具体的には、バイオマーカー、環境DNA、微化石などの「生命の痕跡」から、目に見えない津波の痕跡を捉えるとともに、花粉化石や樹木年輪を用いて津波の発生年代を高精度に決定することを目指します。これらを組み合わせることで、過去の巨大津波の規模や発生履歴をより正確に復元し、将来の津波リスク評価につなげます。

このような新たな津波研究には、地質学だけでなく、生物学、化学、年代学、考古学など多分野との連携が不可欠です。創発とTranSEHAという二つの学際的な枠組みを活用しながら、2011年の東北地方太平洋沖地震に伴う津波を経験した日本から、次世代の津波研究を発信していきたいと考えています。　（篠崎鉄哉）



石垣島の津波石　創発では、こうした目に見える巨大な痕跡とは対照的に、マイクロ・分子・遺伝子レベルの「見えない津波痕跡」の検出を目指します。

国際共同研究「ベトナム中部・タインロイ城郭遺跡の実態解明によるチャンパ王国史の復元と考古地磁気強度モデルの充実」

TranSEHAの国際共同研究「ベトナム中部・タインロイ城郭遺跡の実態解明によるチャンパ王国史の復元と考古地磁気強度モデルの充実」に、東南アジアを専門とする考古学者として取り組んでいます。考古地磁気研究グループの北原特任助教とともに、これまで数年にわたり、ベトナム考古学に考古地磁気学の手法を導入する試みを続けてきました。



ベトナム中部・タインロイ城郭遺跡における城壁の調査

ベトナム側の関心も高く、本研究にはフエ、ダナン、ホーチミンの各市から5名の共同研究者が参加しています。

2026年8月の約2週間の日程で、フエ市とダナン市においてフィールド調査を実施しました。チャンパの城郭址であるフエ市タインロイ遺跡では、フエ大学科学大学（University of Sciences, Hue University）と共同でRTK-GNSS（衛星を利用した高精度測位技術）による測量を行い、城壁の断面形状を把握しました。併せてドローン測量も実施しており、現在作成中のDEM（地表面の高さを数値化した地形データ）による城壁の可視化が期待されます。また、建材レンガの考古地磁気強度測定も進行中です。

今後はタインロイ遺跡と、長年調査を行ってきたダナン市チャーキュウ遺跡のレンガを比較し、両遺跡の年代や関係性を検討することで、チャンパ史の復元に新たな手がかりを得たいと考えています。本国際共同研究を通じて、ベトナムと日本とをつなぐ学際的な研究交流の更なる進展を目指します。

（山形眞理子）

徳島三波川変成帯フィールド調査

三波川変成帯は、日本南西部を代表する高圧型変成帯で、主として白亜紀に形成された沈み込み帯複合体と考えられています。関東山地から紀伊半島、四国を経て九州まで分布し、泥質片岩、砂質片岩、珪質片岩、苦鉄質片岩など、沈み込み帯での変成作用を受けた多様な岩石から構成されています。

三波川帯が広く分布する四国東部の徳島県高越山周辺において、考古地磁気研究グループおよび激甚災害と年代測定グループの南は、Hossein Azizi教授（イラン・クルディスタン大学）、安間 了教授（徳島大学）、青矢睦月准教授（徳島大学）、淺原良浩准教授（名古屋大学）らとともに、2026年9月3日、4日にフィールド調査を行いました。調査では、エクロジャイト質青色片岩（ブルーシスト）や緑色片岩（グリーンシスト）、



徳島県高越山周辺におけるエクロジャイト質青色片岩の観察および試料採取



鮎喰川沿いにおける御荷鉾緑色岩類の観察および試料採取

御荷鉾緑色岩類などを採取しました。青色片岩や緑色片岩は、片理が発達しているため薄く剥離しやすく、平坦な形状への加工が容易であることから、弥生時代中期の磨製石器の石材として利用された例が認められます。今後、採取試料の岩石学的・地球化学的特徴を明らかにし、石器石材との関係を検証することで、石材の選択や利用、さらにはその供給・移動の解明につながることが期待されます。

（南 雅代）

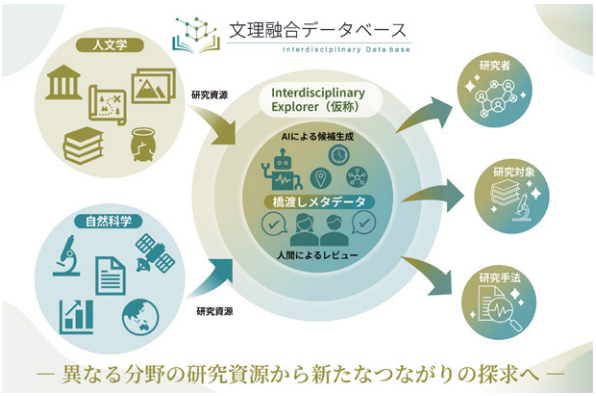
生成AIで異分野をつなぐ「橋渡しメタデータ」の試み

文理融合データベース研究開発グループでは、異なる分野の研究成果や研究資料をつなぐ仕組みを情報基盤の観点から模索することを進めており、その一環として、研究対象、時間、場所、手法などに着目し、分野間の共通点や関係性を示す「橋渡しメタデータ」の活用を検討しています。

現在は、論文本文や書誌情報をもとに、生成AIを用いて橋渡しメタデータの候補を作成する方法を試みています。単に同じキーワードを持つ研究を探すのではなく、内容上の共通点や関係性をもとに、異なる用語や概念を用いる分野の間であっても関連する研究の探索ができるようにすることが狙いです。また、生成AIによって生成された橋渡しメタデータの候補はそのまま確定情報とするのではなく、内容の妥当性を人が確認することを前提とした設計にしています。

将来的には、論文だけでなく、観測データ、歴史資料、写真、文化財・遺跡に関する記録など、分野や形式の異なるマルチモーダルな研究資源にも対象を広げていく予定です。本グループでは、こうした研究資源を時間、場所、対象などの情報を手掛かりに横断的にたどり、これまで接点が見えにくかった研究分野の間にある新たなつながりを可視化することで、TranSEHAが目指す超学際研究や融合研究ネットワークの形成を支える仕組みの実現に向けて取り組んでいます。

（伊藤朋子）



橋渡しメタデータを活用した異分野の研究資源の連携と新たな研究の創出

津波石の調査と磁気分析

過去に発生した巨大津波の履歴を明らかにすることを目的として、南太平洋のトンガ王国で「津波石」の研究を行っています。津波石とは、津波によって海岸に運ばれた巨大な岩石のことで、その移動履歴は、過去の津波の発生時期や規模を知るための重要な手掛かりとなります。

一般的に、津波の発生時期は砂質津波堆積物やサンゴの年代測定によって推定されますが、私たちの研究グループでは、岩石に記録された磁気情報を利用する手法を用いています。岩石は津波による移動後、移動先の地球磁場の影響を受けるため、内部に記録された磁気を分析することで、現在の位置に至るまでの移動履歴を復元することができます。特に、津波による移動が一度だけだったのか、それとも複数回の津波によって繰り返し移動したのかを推定できる点が、この手法の大きな特徴です。こうした情報は、過去の津波の規模や発生間隔を評価する上で重要な手掛かりとなります。

2026年8月にトンガで実施した現地調査では、津波石の観察および試料採取を行いました。現在は採取した岩石を分析用に加工しており、今後、詳細な磁気測定を進める予定です。これらの調査・分析を通じて、トンガ地域における巨大津波の発生履歴の解明を目指すとともに、将来の津波災害評価や防災対策への貢献を目指しています。　（佐藤哲郎）



牧場の中に定置する津波石　詳細な磁気測定により石の移動履歴を復元し、過去の津波の規模や発生間隔を探ります。

一般向け活動 For the Public

夏休み体験学習「琵琶湖から学ぶ地球科学〜地層・水・生きもの〜」を実施しました

2026年8月6日、7日の2日間にわたり、小学校高学年30名（4年生10名、5年生8名、6年生12名）を対象として、「琵琶湖から学ぶ地球科学〜地層・水・生きもの〜」と題したISEE主催の夏休み体験学習を実施しました。

1日目は、大型バスをチャーターし、滋賀県立琵琶湖博物館を訪れました。午前中は、琵琶湖のプランクトンを実体顕微鏡や生物顕微鏡で観察し、普段は目にすることのない小さな生きものを通して、琵琶湖の豊かな生態系を体感しました。午後は、里口保文学芸員から地層の講義を受け、展示室で古琵琶湖層群や火山灰層を観察しながら、約400万年にわたる琵琶湖の成り立ちについて学びました。その後、参加者は3班に分かれ、教職員や大学院生の引率のもと、博物館内の展示を自由に見学しました。

2日目は、ISEE にて、琵琶湖の湖水と、参加者が各自持参した身近な水を使って、化学的酸素要求量、りん濃度、窒素濃度などの水質分析を行いました。さらに、琵琶湖周辺の地質や火山灰について学び、さまざまな火山灰の顕微鏡観察を通して、自然環境を観察・分析によって調べる研究の一端を体験しました。最後に、2日間の学びをまとめたポスターを3班に分かれて制作し、保護者の方も見守る中で発表しました。

琵琶湖を訪れて実際の自然に触れ、実物の観察と分析を経験し、さらに自ら考えてまとめた成果を発表する一連の体験を通して、地球科学や身近な自然環境への興味を深める機会となりました。（南 雅代）





※TranSEHAが、開催する一般・学生向けイベントの情報は、TranSEHAのウェブサイトで公開しています。
https://transeha.isee.nagoya-u.ac.jp/for-the-public

理系漫画『広域テフラってなんだ!?』を発行しました

今回発行した理系漫画『広域テフラってなんだ!?』では、広域テフラの特徴や、それを用いた年代測定の基本的な考え方、研究の応用例、今後の利用可能性などをわかりやすく解説しています。

「広域テフラ」とは、大規模な火山噴火によって放出され、給源である火口から数百〜数千キロメートル離れた場所まで広く降り積もった火山噴出物（テフラ）のことです。噴出したテフラのうち、火山灰などの細粒のものは、偏西風などによって遠方まで運ばれ、短期間に広い範囲に堆積します。このため、同じ噴火に由来する広域テフラは、地層の年代を知るための重要な基準（鍵層）となります。遺跡から噴火年代がわかっている広域テフラが見つかると、このテフラ年代を手がかりにして遺跡の年代を推定することができます。

今回の漫画は、理系漫画家「はやのん」さんと理系漫画制作室が中心となり、激甚災害と年代測定グループの奥野、平峰、南、後藤（ISEE・研究支援推進員）が協力して制作しました。





※今回発行した『広域テフラってなんだ!?』をはじめ、「・・・ってなんだ!?」シリーズは、宇宙地球環境研究所のウェブサイトで公開しています。 https://www.isee.nagoya-u.ac.jp/hscontent/books.html#nanda

TranSEHA2026年度後半の主な予定 Upcoming Events

2026年	10月	**第5回TranSEHAセミナー**「創発的研究支援事業とは？―制度紹介と「津波の記録を掘り起こす」研究―」
		第6回TranSEHAセミナー「OTSO（v1.3.0+）ØC Functions and Applications」
	11月	**「2026 International Symposium on Historical Astronomy」**を韓国天文院（KASI）と共催（11/5-6、於 韓国）
	12月	**第4回TranSEHA若手セミナー／「テクノ・シンポジウム名大」**（12/12、於 名古屋大学 ES総合館 ESホール） 「生命・技術・社会をつなぐ低温プラズマ科学と宇宙地球環境科学〜異分野が交わる学際研究のフロンティア〜」
2027年	2月	**TranSEHA第3回研究会**（2/18、於 国立歴史民俗博物館）
		「トップ女性研究者による宇宙地球環境科学ー宇宙科学ー」講演会（2/27、於 名古屋大学 理学南館 坂田・平田ホール）
	3月	研究集会「宇宙地球環境の理解に向けての統計数理的アプローチ」（3/17-19、於 東京）

文部科学省 共同利用・共同研究システム形成事業
～ 学際領域展開ハブ形成プログラム ～

宇宙地球環境科学と歴史学・考古学を結ぶ超学際ネットワーク形成

申請機関名：国立大学法人東海国立大学機構名古屋大学宇宙地球環境研究所
体系的番号：JPMXP1324134720

Message

国内にある複数の研究機関が連携し、各機関が強みを生かし、また補完しあいながら、研究を進めています。セミナー等で伺うお話の内容を全て理解することはできなくても、「こういう研究があるのだ・可能なのだ」と知ることが、新しい研究を作るきっかけに繋がるのではないかと思います。そのような緩やかなネットワーク形成や知見の伝達も、本事業の良さだと考えます。

川本 悠紀子

巨大災害をもたらす火山噴火や地震などは、地層の記録を読み解くことで、過去の事例が集められます。考古遺跡やテフラの保存は、記録媒体である地層の特性に依存するため「ピースの欠けたパズル」であると常に意識しています。

奥野 充

TranSEHA Newsletter Vol.03 2026年11月10日発行

編　集　TranSEHA学際ハブ 編集委員会
発行者　名古屋大学宇宙地球環境研究所 超学際ネットワーク形成推進室 南 雅代
発行所　名古屋大学宇宙地球環境研究所 超学際ネットワーク形成推進室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学 研究所共同館II 309号室
e-mail: transeha-koho@isee.nagoya-u.ac.jp
TEL: 052-789-3082
WEB: https://transeha.isee.nagoya-u.ac.jp/

文部科学省　名古屋大学 NAGOYA UNIVERSITY　ISEE 宇宙地球環境研究所 Institute for Space-Earth Environmental Research